翻訳規範、ハビトゥス、ローカリゼーション

山田　優
立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

Abstract
Focusing on Gideon Toury's 'translational norms', this article reconsiders in-depth meanings of the term 'norms' and explores possibilities to develop methodological approaches for relating the 'norms' to Bourdieusian concepts of field and habitus. Also, its application to localization is taken into consideration as a part of case study for my future research project.
According to Toury (1995), translation is a norm-governed activity; however, the term 'norms' are understood differently among researchers and practitioners. Practitioners treat norms in a prescriptive sense telling them what the translation *should be*, whereas researchers from descriptive and pure translation studies regard them as descriptive statements stating what the translation *is*. The difference is captured in terms of a descriptive aspect in this paper.
In turn, the descriptive 'norms' are compared with Bourdieusian model of habitus as well as field; specifically, the two methods to study norms, 'textual' and 'extratextual', suggested by Toury, are reduced into 'habitus' and 'field', respectively. In the last part of the paper, the application of this method to a case study, translation practice in localization fields, are touched on, with raising further research questions that need to be addressed.

1. はじめに

翻訳は、翻訳の規範 (Translational norms) に従った行為と考えられるが、この「規範」の概念には曖昧な部分がある。実務翻訳や応用翻訳理論では、一般的に翻訳を規定(prescribe)するガイドラインや規則のように考えられており、これは、翻訳教育や教材でも応用されている (Shuttleworth & Cowie, 1997:113)。これに対し、記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies) や Pure translation studies では、規範は、中立的で特定のコミュニティーや文化の中で作り出される訳出物の特徴を表す概念とされる (ibid.)。実際に翻訳を実践する者や応用教育者の間では、規範は規定性が高い概念と捉えられている一方で、DTS 翻訳研究者にとっては、規範が実践を規定する抗力はもう少し低いと考えられている。後者にとって、規範とは、Competence と Performance の中間に位置するもので [1] (ibid.: 113-114)、規則 (rules) と個人の特異性 (idiosyncrasies) の中間に存在するものである (Toury, 1995: 54)。Toury が示す規範は、ST-TT の関係を明らかにし、DTS との橋渡しとして、最終的に規範の解明は翻訳行為の法則(laws of translational behavior)を導き出せるとも考えている (ibid.: 259)。これは、規範の規定性は、規則と同じくらい強いことを示唆する。Baker (1998)

は、「規範とは、ある社会・歴史的コンテクストで、習慣的に選択する選択肢である」とし(ibid.: 164)、「規範」は「翻訳者」の「選択肢」と捉える。つまり、Even-Zohar や Toury ように、マクロ的な文学的多元システムを用いて説明する規範の概念も、ミクロの次元では翻訳者個人が介在している事実があるので、規範そのものの理論的限界や矛盾が生じるのは避けられない。これに対応して、翻訳者の状況を、社会・歴史的に捉える研究的枠組がブルデューの「ハビトゥス」と「場」のモデルを用いて展開したのは想像に容易い。

本稿では、Toury の規範の概念を再考し、ブルデューの概念との交点を考察する。その上で、翻訳の実践現場、特にローカリゼーション翻訳分野の研究への応用可能性を模索し、今後の翻訳規範理論の枠組と筆者の研究テーマの方向性を示す。

2. Even-Zohar の多元システム理論

Toury の規範の概念は、Even-Zohar (1978/1990) の文学的多元システム理論 (literary polysystem theory) を基に発展した。ここでは、まず Even-Zohar の概念を再考する。

ローマン・ヤコブソンらを含むロシア・フォルマリズムから影響を受けた Even-Zohar の理論は、それまでの文学に対する古典的アプローチへの反動であった。ロシア・フォルマリズムは、言語の機能的側面を主張し、文学研究が、古典的歴史主義、文化史や社会史に依拠していることを批判した。この影響は、文学の世界では 1920 年代にニュークリティシズムを生み出し、テクスト外 (extra-textual) の情報、特に著者の経歴などから作品を読み解く手法は批判されることになる [2]。Even-Zohar も、それまで文学の間で「形式性が高い (high form)」とされた詩などを単独の文学として独立に研究の対象とするのではなく、形式性の低い (low form) 子供向け文学などとの相互作用を踏まえ研究対象とすべきとし、ひとつの文学を、文学的システムの一部と捉えた動的な多元システムを提唱した。多元システムでは、各文学システムが階層的に存在し、ここで「中枢(central)」であるか「周辺 (periphery)」かが重要になってくる。翻訳文学は一般的には周辺的なポジションにあるが、以下の 3 つのケースでは、中枢になりうるという。

a) 多元システムがまだ固まって (crystallized) いない、つまり文学が、まだ確立される途中段階にあり、「若い」とき
b) 文学が周辺的もしくは弱い、またはその両方のとき
c) 時代の変り目、危機、など文学に真空状態が生じるとき

(Even-Zohar, 1978/1990: 193-194)

この状況下で、翻訳文学が多元システムの中枢にあると、それに伴って、翻訳者は、自分の目標文化内にある既存の文学規範に従って翻訳を行うのではなく、むしろそれまでの文学規範を破壊するような翻訳を行なうことになる。結果として、翻訳文学が、多元的システムを形作る方向に作用し、翻訳としては、起点言語に対して adequate な（SL の文化と言

語の特徴に合わせる）訳出になる。大雑把な言い方をすると、この状況における翻訳は、直訳調になり、それが国内の文学に新たな影響を与えるかもしれないということだ。

その逆に、翻訳文学が多元システムにおいて周辺にあれば、翻訳は目標言語文化にある文学（分野）の規範に倣うので、訳出も前者よりは保守的になる。この場合、翻訳が意訳になるかは別としても、中心的な文学の規範に合わせて翻訳が作られると考えてよいだろう。Even-Zohar の規範の考え方は、このように、翻訳の基本的な方略の決定に作用するものではあるが、規範は各システムに内在している考え方であり、翻訳者がどの規範を用いるかは多元システムの状況に依るとする。つまり、今、どのような翻訳規範が働いているか、どのような翻訳傾向があるかを、その文化内の多元システムの翻訳文学システムが中枢にあるか周辺であるかという、マクロ的な視点から捉えようとするアプローチであるともいえる。

3. Toury の DTS

Toury (1995) は Even-Zohar の理論を発展させ、翻訳の一般理論化を目指した。ただ、多元システムの概念は継承してはいるものの、Toury は翻訳を支配する「翻訳行為の法則 (laws of translational behavior)」を導きだすことも主張するため、規範の考え方がもう少し科学的で厳密になる。

Toury の貢献は、まず、それまでの翻訳研究をもシステム化すべく、記述的翻訳研究 (DTS)を提唱したことにある。従来の翻訳研究は「等価」の視点から、SL と TL を比較して、TL に翻訳する際にどのような方略にすべきか、またはその文法的ズレを探るという、言語レベルでの研究が中心であった [3]。研究の前提に「等価性」維持があり、言語間に存在する意味を静的に捉えている。Nida の動的等価 (Dynamic equivalence) にしても、Catford の Shift アプローチの formal correspondence にしても、そこに絶対的にあるがごとき意味を伝えるための手段として、「こう翻訳すべきである」というように、翻訳を規定する方法論的色合いが強い。コミュニケーションモデルに言及して説明すると、これらの研究は、「導管モデル」(吉田, 2007 参照)を前提としており、A 言語の話者（著者）の伝えたいメッセージが先行して存在し、B 言語に話者（読者）に伝達されるためにメッセージがコード化（言語化）されて伝わると考える。つまり、それまでの翻訳研究の基盤も、同様の観点から、コード化の方法、この場合は、翻訳の方法が注視されてきたと言える。

しかし DTS は、焦点がまったく逆で、既に翻訳された ST と TT を比較し、そこにある原文と翻訳の対照ペア (coupled-pair) を成り立たせている傾向、もしくは規則性を記述することを目的とする。「等価」の観点から言えば、DTS では、翻訳されたものにはすべて「等価」が成り立っている。また、理論の前提となるコミュニケーションモデルで説明すると、先の「導管モデル」ではなく、ロシア・フォルマリズムの流れを汲むヤコブソンの「6 機能モデル」(ヤコブソン, 1973)[4] や「出来事モデル」(吉田, 2007: 24 参照)に近く、発話された（書かれた）メッセージを中心的に扱うアプローチになる。研究の対象は「社会に

語用的規範やルールのもとで行なわれる発話出来事」になる(ibid.)のだ。

4. Toury の規範

以上を踏まえ、Toury (1995)の規範の概念を再考する。まず、Toury は「翻訳行為 (translation activities) とは、文化的重要性のあるもの」とし、言語学や語用論の視点からだけでは、翻訳者になることは説明できないとする。翻訳者に必要なのは、「社会的役割を果たす(to play a social role)」ことであり、翻訳とは、社会文化的観点からいえば、その制約に従うことである。社会学者や心理学者が考えるのと同様に、規範とは、ある共同体の中で共有される一般的な価値観や考え方を意味しており、特定の状況において、ある行動が正しいのか、間違っているのかの判断基準となるものとされる。個人は、自分の社会活動を通して規範を習得してゆく。

抽象的ではあるが、以上が個人（翻訳者）が規範に対してどのような態度をとるかの説明である。これは常識的に理解できるものである。Toury のいう「翻訳は規範に支配された活動である」という前提に立ち、翻訳者と規範との関係が説明されている。では、具体的に、「翻訳の規範」とは何か。それは以下の説明で補足される。

社会文化的制約には 2 つの極 (poles) があり、一方は規則 (rules)で、もう一方は特異性 (idiosyncrasies) である。規範 (norms) は、この中間に位置する。

この説明もまだ具体的でないが、後に説明される initial norms を理解することで、もう少し明確になる。

翻訳は SL と TL の 2 つの文化を仲介するので、2 つの言語、価値、伝統などを伴う活動である。つまり、2 つの価値(value)があるために、翻訳の際、SL の価値を TL にどう表現するかという問題に直面ことになる。SL のテクスト寄りに翻訳を行なうか、TL 寄りにするかということだ。このとき、「規範」は、SL にも TL にも存在しているから、翻訳者は、SL の規範か TL の規範に従うと言い換えることもできる。前者の場合、翻訳は adequate になり、後者の場合 acceptable になる。これを initial norm と呼んでいるが、いずれも 2 者択一に存在するのではなく、段階的なスケールにあるので、どちらかの方向性に依拠し翻訳することになる。

ここで注意したいのは、この initial norm とは、単純に翻訳の方略や方法のように、規定的 (prescriptive) に理解できない点である。確かに、adequate と acceptable は、直訳と意訳、formal/dynamic equivalence, foreignization/domestication[5] と並列的に捉えられる概念であるが、Toury の DTS の記述的研究の観点からは、発想が逆であり、ST/TT を対照ペアにして考察した結果として、その翻訳が adequate にあるか acceptable にあるかを観察することになるのは、先述した通りだ。また Even-Zohar の多元システムとの関連で言えば、翻訳が adequate にある場合、翻訳文学システムが中心的ポジションにあるといえるが、翻訳が acceptable の時は、翻訳文学以外のシステム（創作文学システム）が優勢にあり、翻訳は創作文学システムの規範の影響を受けることになる。

では、翻訳の規範の定義に話を戻すと、どのような解釈が可能になるのだろうか。Toury は、規範は規則と特異性との中間にあるものとしたが、これは翻訳の規範の自律性と考えられないだろうか。規範は「規則」により近い拘束力を持つものである。規範と規則との違いは、目に見えるか見えないか、換言すると、翻訳者の意識にある規則か、意識されない規則か、ということだ。規範の研究方法で Toury も説明するように、規範は目に見える形では観察できないが、規範に支配された行動は観察することができる (p.65 参照)。これはひとつは textual なデータやコーパスを研究するか、もしくは extratextual なデータから考察することから可能になる (ibid)。こう考えると、Toury の規範とは、翻訳者を無意識に支配する法則であり、構造主義的な科学色の濃いアプローチに支えられた概念であるといわざるを得ない。DTS の方法論自体がボトムアップ的に収集したデータから翻訳の規則 (laws of translation) や普遍性を導き出しうることを説いていることからも、DTS が翻訳の普遍法則を目指した研究でもあり、規範は、Competence と Performance の区分で言えば、前者に近いニュアンスを含むのだ。

当然これへの批判はある。ST/TT の対象ペアからの考察に限られるので、規範の記述が言語的側面中心になる。結果として、文脈（とテクスト内）にあるイデオロギーや政治権力の要素が軽視されてしまう(Hermans, 1995)。また、普遍法則として、翻訳者の意思決定を一律化できるのかという疑問である(Hermans, 1999)。方法論的にも、prescriptive か descriptive かの立場しだいでは、規範の有効性が問われる。翻訳（や通訳）は、理論と実践の 2 つ局面を常に抱えているため、理論の応用や理論の検証の問題がつねに議論の的になる。Toury 自身も DTS マップの中で、翻訳研究の応用をいくつか示しているが、基本的な立場は,「実務者 (practitioners)」が考えればよいとしている (Toury, 1995: 17 参照)。結局、最大の問題点は、翻訳には翻訳者が関与している事だ。先述通り、Toury も翻訳者と規範との関係や社会的役割を十分に理解しているが、DTS では、その記述に限界がある。もう少し翻訳者個人とコンテクストを社会・歴史的側面から扱えるような枠組が求められたのも事実で、以下では、そのひとつと考えられる、ブルデューのハビトゥスの概念を用いた研究を考察する。

5. 翻訳者のハビトゥス

ハビトゥスは社会学者のピエール・ブルデューの概念で「主体に内面化された客観性であり、状況において、状況の影響のもとで獲得された持続的な性向である」(ブルデュー, 1993: 155)。ブルデューのモデルの背景には、行為主体の経済的性向と行為主体が活動しなければならない経済的世界との説明が、構造主義的マルクス主義のマクロ的視点から、客観主義立場で抽象化されてきたことへの批判がある(ibid.: 5)。ブルデューは社会関係を「場 (champ, field)」の文脈において分析する。「場」とは、一定の自律性をもった社会的空間で、利害がかけられた闘争の成立する場である。「場」は支配階級と従属階級の権力闘争の場である。この「場」から正統性 (Legitimacy) が引き出される。正統性は象徴資本という形態

で表象される。大雑把に言えば、「場」とはゲームが行われる場所であり、同じ目的を目指す個人や集団の間にある客観的な関係であり、そこでは個人や集団の再生産を保障するための資本の蓄積がおこなわれる。

これにハビトゥスの概念が加わる。「場」と合わせると、ハビトゥスは「ゲームの規則」的な意味合いで、個人の経験に基づいた予測や理解の運営を意味する。ハビトゥスは、歴史的・社会的に状況づけられたハビトゥス生産の諸条件を限界としてもつ生産物―思考、知覚、表現、行為―を、全く自由に生み出す無限の能力なのだから、ハビトゥスが保証する自由、条件づけられ、かつ条件づきの自由は、初期条件づけの機械的な単なる再生産からも、予見できない新奇なものの想像からも、等しくかけ離れたものである (Bourdieu, 1990: 55)[6]。「宿命」や「規律」に対し、行為主体が従順にふるまうか、それとも大胆に革新的企てを仕掛けるか(ブルデュー, 1993: 154)ということが、ある階級のハビトゥスとして行為主体に内在化され、一群の性向の集まりをなす (ibid.: 155)。ハビトゥスの概念の最も強力な側面の一つは、主観的に形成されたものが客観的な行動にあらわれることである。これは社会科学者にとって主観的・客観的な社会学的理論の間に横たわるギャップを橋渡しするものとなる。

翻訳という行為をこのモデルに適用すると、翻訳の「場」に翻訳者のハビトゥスが関与し、翻訳行為は「場」で繰り広げられる「実践(プラティーク)」と捉えることができる。翻訳の「規範」に対して翻訳者は、それに「従順」な態度をとるか、「逸脱」するか、ブルデューの言葉でいえば、正統 (orthodoxie) か異端 (heterodoxy) か、その「場」での方略が取られる (Sela-Shaffy, 2005: 5)。

このモデルを応用した翻訳者のハビトゥス研究は、Simeoni (1998) 等に先駆的に見られた。Simeoni は翻訳者が規範等に従うという「従順性 (submissive)」について、翻訳者のハビトゥスから分析し、Toury の TT 内の文学的規範に対し翻訳者が従う傾向にある理由を、長い歴史の中で翻訳者が権力者の奉仕者 (servants) とされてきた点をあげている。Simeoni は翻訳者の創造性は皆無であり、その理由は、規範に従わないと処罰にあうから、と指摘した。この状況は西洋文化で数百年と続き、翻訳のあらゆる分野に影響を及ぼし、20 世紀の終わりまで続いたという。彼は翻訳者がなぜ発案者や革新的な役割を果たさないかをこのように説明した。

しかし、この Simeoni の説明も、規範と翻訳行為をやや静的に捉え、また翻訳者を受動的な主体と位置づけている点で Toury の概念を補完するものではあるが、一般化しすぎている点が指摘されている (Gouanvic, 2005; Ingilleri, 2003, 2005; Sela-Shaffy, 2005; Wai-Ping, 2007 等)。Sela-Shaffy (2005) は、Simeoni の翻訳者の低い身分は、すべての時代と文化で同じように形成されるとする説明、また翻訳者の従順性をすべての分野に一般化することは誤りであるとする。一見、個人の性向は、あらかじめプログラミングされていたかのように理解されるが、「場」が変化すれば、変化は許容される (ibid.)。つまり、Simeoni の分析には、行為主体と「場」との相互作用が欠落しており、本来、翻訳者は場に存在する規範に従順になるだけでなく、場とハビトゥスの作用により、「無限に生産物を生み出す能力」

があると強調した (ibid.)。

Sela-Shaffy は、また、「場」の複雑さのへの考察も必要だとし、ヘブライ語の翻訳界の状況を例に解説する。Gouanvic (2005)も、Simeoni が Toury の規範をハビトゥスで説明しようとした点を一定の評価をしながらも、Simeoni のブルデューの概念の理解に疑問を投げかけた。

このように、ブルデューの枠組は、問題は残るものの、Toury の規範の概念を翻訳者（集団）のハビトゥスとして捉えることで、全体を動的に、そして歴史や背景等のコンテクストを含めて考えられる点で、翻訳や通訳の各専門分野を取り巻く要素を総体的に考察できるものと考えられる。

6. 規範としてのハビトゥス

では、ハビトゥスは「規範」の概念と置き換わるものだろうか。もう一度、Toury とブルデューのモデルを考えてみたい。まず、規範は、翻訳者の意識下にあり、訳出物を支配する規則であると述べたが、マクロ的には、多元システムの中にあるシステム内で競合しあうものでもある。訳出を支配する傾向が規範であり、一方でその傾向を生み出している理由は、「社会的役割を果たす」翻訳者が、社会文化の制約に従っているからである。つまり、規範とは、翻訳者自身の中にあるものでもあり、翻訳者の外界にも存在するものであると解釈することが可能である。一方ハビトゥスは、「主体に内面化された客観性…性向であり」、「ある集団…のハビトゥスは」…客観的な行動にあらわれる。これは、規範とハビトゥスの概念が一致することを示しているといえるだろう (Sela-Sheffy, 2005)。かくして、「場」の概念を導入することで、主体である翻訳者の翻訳行為を「実践」として考察できるようになる。個人（集団）と場の認知や対立、マクロ的規範とミクロ規範を捉える枠組になりえるのだ。

具体的方法論としては、Touryの規範を再構築 (reconstruct) する２つの方法である textual と extratextual を、ブルデューの枠組と対応させる。textual の分析がハビトゥスの分析に、extratextual が「場」の分析となりうるのではないかということである。規範の textual はハビトゥス分析として、翻訳された TT と ST とを検証することにより、客観的規則性を探すことができる。これは翻訳を支配する規範が存在するテクストの分析となり、導き出される法則は客観的で行為主体の意識に上りにくいものである。DTS に限定された言語学的な規則性の解析だけに留まらず、談話分析や脱構築の手法を用いることにより、社会・歴史的要素も、露呈させることができると考えられるのだ。つまり、翻訳テクストに内在する言語的な自律法則だけでなく、訳語の対照ペアに存在する権力や力関係等から、訳者の向性もしくはハビトゥスを見ようというものだ。一方、extratextual に対応する「場」の分析は、翻訳者や翻訳に携わる制作者、批評など、翻訳について語られた内容や理論などから、規範の再構築を行う。こちらは、翻訳物でなく翻訳者が翻訳について語ったことなどの副産物（インタビューや翻訳批評）の分析になるので、主観性が高く、意識に上りやすい。

行為主体やそれに関わるプレーヤーらの翻訳に対する意識として考察できるだろう。まだ方法論の詳細は精緻化する余地は残るが、Toury の規範とブルデューのモデルは、お互い補完しあう形で、翻訳研究に応用可能な枠組となると考えられる。以下では、実際のローカリゼーション翻訳の状況に対し、以上の分析枠組みがどのように応用可能かを概観する。

7. ローカリゼーション翻訳の「場」

翻訳といっても、文芸等の出版翻訳からソフトウェアのローカリゼーションまで様々な分野が存在する。ここではローカリゼーション翻訳の分野の「場」をどのように区分し、分析できるかを考える。

まず厳密にどのレベルをローカリゼーション翻訳の「場」とするかが問題になる。ローカリゼーションの辞書的な定義は、LISA 等[7]でなされているが、いずれの定義も、ローカリゼーション翻訳を他の翻訳分野と決定的に区別するものではない。ただ、実務においては、ローカリゼーションとそれ以外とを区別することはよくあることで、その特徴として、翻訳メモリを利用していること、チーム翻訳が行なわれること、クライアントと翻訳者の関わりが強いこと等が挙げられる (山田, 2007)。この観点からローカリゼーション全体をひとつの「場」として括ることもできるが、様々な変数やその程度、Skopos[8]によって、会社別もしくは製品別に「場」を設定する必要もあるかもしれない。実務における翻訳メモリを基軸にすれば、メモリが製品別に管理されている現状から、翻訳会社が一つのプロジェクトとする単位、それに伴う翻訳者を選定する場合も、製品＝翻訳メモリの管理単位、とするならば「場」の考察も、同単位で行なう必要がある。

「場」の階級の差異化に影響する要因は、翻訳チームとクライアント/翻訳者に内在する関係である。山田 (2007) では、この力関係を「縦」と「横」の縛りと表現したが、別の表現でいえば、「敵」と「見方」の権力関係と言うことができる。「敵」となるクライアントと翻訳者の関係には、当然、ある一定の主従関係が成り立つわけだが、ここで問題にするは、このような単純な力関係ではない。クライアントと翻訳者の力関係は、ローカリゼーションの分野に限ったことでもなく、他の分野でも見られることだからだ。それよりも、ローカリゼーションに特有になのは、作業フローに対する考え方の違いである。ローカリゼーションという言葉の含意でもあるが、ローカリゼーション翻訳の作業行程は、技術系の「ものづくり」のプロセスで行われている。工業製品や取扱説明書のローカライズは、製品の開発に倣って行われるものであり、進行管理はもとより、品質管理、コスト管理もエンジニア的作業フローに依拠し実行される。これらはあからさまに感じられることではないが、クライアント側には共通の認識としてあり、翻訳者との間に、成果物の評価方法やコスト意識で、ズレを生じさせている。時に、仲介業者として入る翻訳会社が、クライアントと翻訳者との間の役割をすることで、緩衝材となりズレの程度が変化する。そもそも、翻訳メモリを利用するという事実も、過去の資産の再利用する意味で、エンジニア的発想を象徴しているだろう。これらが、どう（悪）影響しているかを考察するのは今後の

課題だが、まずローカリゼーション翻訳の「場」の条件として挙げておきたい。

「味方」の軸では、翻訳メモリ共有された状況では、翻訳チーム内に格差が生まれることになる。リーダー格の訳者は、ベテラン翻訳者としてチーム内の規範をリードする立場にある。リーダーの訳文は、翻訳メモリのデータベースに登録できる権限を与えられるが、見習いの訳者に同等の権限は与えられないこともある。この場合、見習いの訳者は、他人の既訳を参照するのみで、自分の訳文が他の訳者に参照されることはない。この差は、翻訳者のメモリに対する従順の度合いを左右すると考えられる。ベテラン訳者は「規範」となる訳文を作る側になるが、後者はもっぱら、規範に習うだけである。味方同士なので、対立しあうことはないが、翻訳メモリを介する作業に格差が生じるので、「場」の構成要因として考慮したい。

8. ローカリゼーション翻訳者のハビトゥス

ローカリゼーションにおいて翻訳者のハビトゥスを理解するには、翻訳メモリとの関係から考えるのが分りやすい。実務翻訳では、概して翻訳メモリを扱える者とそうでない者が重要な区分条件となっている。ローカリゼーションでは、当然メモリを扱えることが必須条件であるが、これは必ずしもその翻訳者の「階級」が高いことを指標しない。むしろ業界全体からは逆である。翻訳メモリのその機能的な性質上、訳者は、既訳に対し従順に対応しなければならず、誤訳が登録されていることもあるので（山岡, 2001）、柔軟な処理が要求される。翻訳者の「透明性 (invisibility)」の観点からは、Venuti (1995) の議論の趣旨とは異なるが、ローカリゼーションの翻訳者は限りなく透明でなければならないという、暗黙の了解があることも事実である。これは、TT に対して透明なのではなく、翻訳メモリの既訳に対して透明であるということだ。これが理由で、メモリを使った翻訳は「つまらない」と言う者もいる。

ハビトゥスは、翻訳者に内面化された客観性であるので、方法論で述べたように textual の分析によって、翻訳者の向性を示唆できる可能性がある。翻訳メモリは、原文と訳文のコーパスの宝庫であり、メモリを用いた翻訳行為は、コーパス分析をした結果として妥当な訳文を生成する作業でもある。メモリが絶対な規範として作用するように考えられる反面、同じメモリと翻訳者を、違う「場」に投じれば、異なる結果になるかもしれない。この「差」がローカリゼーション翻訳者のハビトゥスを示してくれると考えられるだろう。

9. 今後の課題

本研究ノートは、筆者の研究の枠組となりうる方法論を模索する目的で Toury の規範を再考し、ブルデューのモデルとの相関性を考察した。筆者の関心は、翻訳メモリが翻訳（者）に及ぼす影響や有効性を解明することにあるが、（構造・機能）言語学的側面からの研究だけでなく、翻訳行為を社会的相互行為と捉えるうえで翻訳理論で中心的概念となる「規範」

を中心に、研究への応用の方法を考えてみた。本稿では大まかな方向性を描いたが、方法論の詳細と具体的なデータ研究については今後の課題となる。

筆者紹介： 山田優 (YAMADA Masaru) ウエストバージニア大学 言語学科修士課程修了。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士課程後期課程在学中。ローカリゼーション業務に従事。
連絡先 ：yamada@apple-eye.com

【注】

1. Toury (1980, 1995) が用いた概念。Translational Competence。Chomsky (1965) の区分を真似て、翻訳者の言語的な選択肢 (competence)と、実際に翻訳者が選ぶもの(performance) とを分けた。
2. 特にここで、文学理論を持ち出すこともないが、後述する extratextual の文献から著者や訳者の研究を行なう場合のテクストの扱い方が問題となる。文学では、ニュークリティシズム以降、近年の新歴史主義的手法へと変移する。水野 (2007) は、Toury (1995)に依拠した extratextual の分析を行なったが、ハビトゥス研究では、鳥飼 (2007) のようなインタビュー形式も可能だ。これに加え、吉田 (2007) のように談話分析を用いる方法も考えられる。Simeoni (1998)、Gouanvic (2005)、Sela-Sheffy (2005)らの研究を含め、今後、方法論も再検討が必要である。
3. Jeremy Munday (2001) Ch. 3, Ch. 4 参照。
4. 原著：Jackobson. R. (1960). Closing statements: Linguistics and poetics, In T. A. Sebeok (Ed.). *Style in language*, Cambridge, MA: MIT Press. 350-377.
5. formal equivalence, dynamic equivalence については Nida (1965)を、foreignization/ domestication は Venuti (1995) を参照。
6. 原文: Because the *habitus* is an infinite capacity for generating products —thoughts, perceptions, expressions and actions— whose limits are set by the historically and socially situated conditions of its production, the conditioned and conditional freedom it provides is as remote from creation of unpredictable novelty as it is from simple mechanical reproduction of the original conditioning. (Bourdieu 1990: 55)
7. LISA=The Localization Industry Standards Association.
   http://www.lisa.org/
8. Skopos は、Vermeer (1978) の概念で翻訳の「目的」を意味するが、ブルデューの「場」との関連性については、今後の研究課題とする。

参考文献

Baker, M. (1998). Norms. In M. Baker (Ed), *Routledge encyclopedia of translation studies*. London/New York: Routledge.

Bourdieu, P. (1990). *The logic of practice* (R. Nice, Trans.), Stanford, CA: Stanford University Press.

ブルデュー, P. (1993).『資本主義のハビトゥス：アルジェリアの矛盾』(原山哲 訳). 藤原書店 [原著: Bourdieu, P. (1977). *Algerie 60: structures economiques et structures temporelles*. Paris: Les Editions de Minuit].

Chomsky, N (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Even-Zohar, I. (1978/1990). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed.). *The translation studies reader*, London/New York: Routledge. 192-197.

Gouanvic, J. (2005). A Bourdieusian theory of translation, or the coincidence of practical instances: Field, 'Habitus', capital and 'Illusio' (J. Moore, Trans). *The Translator*, 11 (2), 147-166.

Hermans, T. (1995). Revisiting the classics: Toury's empiricism version one. *The Translator*, 1 (2), 215-223.

Hermans, T. (1999). *Translation in systems*. Manchester: St Jerome.

Inghilleri, M. (2003). Habitus, field and discourse: Interpreting as a socially situated activity. *Target*, 15 (2), 243-268.

Inghilleri, M. (2005). Mediating zones of uncertainty. *The Translator*, 11 (1), 69-85.

ヤコブソン, R (1973).『一般言語学』(田村すず子・長島善郎・村崎杏子・中野直子・訳). みすず書房

水野的 (2007).「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相—直訳の系譜」『翻訳研究への招待』3-43.

Munday, J. (2001). *Introducing translation studies: Theories and applications*. London/New York: Routledge.

Sela-Sheffy, R (2005). How to be a (recognized) translator: Rethinking habitus, norms, and the field of translation. *Target*, 17 (1), 1-26.

Shuttleworth, M. & Cowie, M. (1997). *Dictionary of translation studies*. Manchester: St. Jerome.

Simeoni, D. (1998). The pivotal status of the translator's habitus. *Target*, 10 (1), 1-39.

鳥飼玖美子 (2007).『通訳者と戦後日米外交』みすず書房

Toury, G (1980). *In search of a theory of translation*. Tel Aviv: The Porter Institute.

Toury, G (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London: Routledge.

Wai-Ping, Y. (2007). Norms, polysystems and ideology: A case study. *The Translator*, 13 (2), 321-339.

山岡洋一 (2001).『翻訳とは何か―職業としての翻訳』日外アソシエーツ
山田優 (2007).「ローカリゼーションにおける翻訳と翻訳理論研究」『翻訳研究への招待』57-68.
吉田理加 (2007).「法廷相互行為を通訳する～法廷通訳人の役割再考～」『通訳研究』第 7 号 19-38.